フィンランドの多島海

一般財団法人日本水路協会審議役　金澤輝雄

2011 年 11 月と 2012 年 11 月に、フィンランドのトゥルクとヘルシンキで開催された会議に出席し、大型客船に乗船したり砕氷船を見学するという経験をしました。フィンランドの多島海なんてどこにあるのかと思われる方がほとんどだと思います。私もトゥルクで船に乗るまでは知りませんでした。

フィンランドは北緯 60 度から 70 度にかけて広がる南北に細長い国で､陸では東にロシア、北にノルウェー、西にスウェーデンと国境を接し、国土の西側はバルト海のボスニア湾、南側はフィンランド湾に面しています。フィンランド湾の最も奥にはロシアのサンクトペテルブルグ、首都ヘルシンキの対岸にはエストニアのタリンが位置します。サンタクロースやムーミンでおなじみの国ですね。

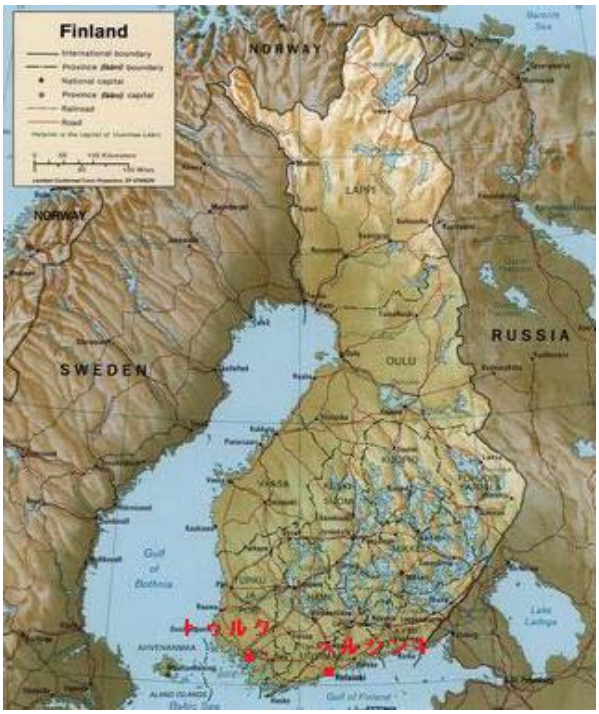

図１　地図

図２　衛星画像（陸上の細い線は国境線）

国土の大半は標高が低く、内陸部には地図（図１）や衛星画像（図２）でも分かるように氷河の削った溝が無数の湖となっており、森と湖の国というイメージの由縁となっています。因みに首都ヘルシンキの水道の水は 100km も離れた湖から管で引いているそうで、おいしい水です。このためか、ヨーロッパ各国のようにレストランでミネラルウォーターを注文する必要がなく、カラフ入りの水がただで飲めます。

言語はフィンランド語とスウェーデン語が公用語なので、町の名前から通りの名前まで二つ別々です。たとえばヘルシンキ(Helsinki)はフィンランド語の表記であり、スウェーデン

語では Helsingfors でまだ関連性が感じられますが、南西にあるトゥルク(Turku)は Åbo と似ても似つかぬ名前となります。さらに、町の通りの名前も二通りなので、市電の停留所の表示も二つの言葉が並べられていますし（写真１）、列車の駅の案内放送も英語を含めた 3 カ国語でした。実際には 90%以上の人がフィンランド語で、スウェーデン語の人は 5%程度ですが、12 世紀から 18 世紀までスウェーデンに、19 世紀にはロシアに支配され、1917 年に独立を達成したという歴史の産物なのでしょう。なお、フィンランド語はウラル語族に属しており、ヨーロッパ大陸の大部分で使われているインド・ヨーロッパ語族ではありませんので、スウェーデン語とは近縁の言語ではありません。

写真１　トラムの二カ国語の行先表示、似たものも全く違う（９番）ものも

さて、表題の多島海ですが、フィンランドの南西部トゥルクの沖合に、ボスニア湾の入り口をふさぐようにアハベナンマー（オーランド）諸島があります。この海域をトゥルクからスウェーデンのストックホルムまで、5 万トンと 6 万トン（定員 3 千人）の大型客船 2 隻が片道10時間ほどで1日に2往復しています。大型船なので船内には客室やレストラン、売店（国際航路なので免税店もある）などの他に、いくつも会議室が備えられていて、移動中に会議ができます。4 日間の会議期間中のある 1 日、朝 8 時頃にトゥルクを出発する便に乗船して午前中に会議、昼過ぎにストックホルムとの中間点くらいに位置するアハベナンマー諸島のマリエハムンという町で下船し、ここでストックホルム発トゥルク行きの便に乗り換えて夜 8 時頃にトゥルクに帰ってきました（写真２）。

この航海で通過したアハベナンマー諸島は、海図（写真３）で見ると無数の小島や岩礁で埋め尽くされています（通常の世界地図レベルでは小さな岩礁が表現されていないので、そのような印象を受けません）。北欧事情に詳しいノルウェーの会議参加者が、この海域は航海するのに世界でも最も危険な場所だと言っていましたが、客船の展望デッキから周囲を眺めると、岩礁と岩礁の間が船の横幅の数倍しかない狭い航路を 5 万トンの巨大船が通過するのは壮観ではあるものの（写真４、５）、職業柄、こんなところで座礁したらという心配がよぎりました。船同士が摺れ違う場所は指定されていて、時間待ちをすることもあるとのことです。

写真２　トゥルク（右上）からマリエハムン（左中央）の航路（黒点）を表示した待合室のパネル

写真３　多島海の海図
色の付いた帯が航路

写真４　係留中の大型客船

写真５　岩礁の間の狭い航路

ヘルシンキでは、多面の大型スクリーンを使って航海者に氷海の中での航海やほとんど船の幅に近い狭くて流れのある航路を通過する航海等の訓練を実施するための操船シミュレーター（写真６）や岸壁に係留されている５千トンクラスの砕氷船を見学しました。

写真６　操船シミュレーターのスクリーン
氷海の中の模擬航海を訓練中

写真７　砕氷船の船内のサウナ

バルト海は浅い海で北海との出入り口もとても狭いので（デンマークとスウェーデンの間は橋や海底トンネルでつながっていて車で往来が可能です）この出入り口の海峡付近を除けば流れや潮汐がほとんどありません。訪問した 11 月の時期は気温がまだ零度前後でしたが、真冬には平均気温が氷点下 10 度くらいになり、数十センチの海氷で覆われますので、砕氷船が大活躍します。海氷に閉じ込められた貨物船を救出したり、船団の先頭を進んで海氷を切り開き、一筋の海面をたくさんの船が一列縦隊で追従するというような場面が見られます。見学した船にはサウナ（写真７）やプールまで備わっていました。

サウナといえば、ドクター村井の“新養生訓”第 13 回のテーマですが、フィンランドではほとんどの家庭にあり、アパートでも地下に共同のものがあるそうです。フィンランドの人に「毎日入るの」と訊いてみたら、「そういう人もいるけれど、自分は週に１回くらいだ」と言っていました。ホテルにも宿泊客用のサウナがあり入ってみたのですが、あまりの暑さ（熱さ）に 1~2 分で退散しました。

最後に、会議の合間の限られた時間の中で見たいくつかの教会をご紹介します。

写真８　ヘルシンキ大聖堂

写真９　ヘルシンキ大聖堂内部

写真１０　ウスペンスキー大聖堂

写真１１　ウスペンスキー大聖堂内部

ヘルシンキ大聖堂（写真８、９）は福音ルーテル派の大聖堂で、ウスペンスキー大聖堂（写真１０、１１）は正教会の大聖堂です。内部の装飾はウスペンスキー大聖堂の方が見応えがありました。

テンペリアウキオ教会（写真１２、１３、１４）は1969年の完成と新しい教会ですが、岩盤を丸くくり抜いて造った教会（天井の一部はガラス張りで自然光が入る）で、内部の壁の剥き出しの岩が評判になり、観光名所の一つになっています。当初はこのような設計ではなかったのですが、音響効果がよいとの助言により、岩肌のまま残すことになりました。ヘルシンキの市街地ではあちこちで、このようなごつごつした岩が地面から顔を出しているのを見かけます。トゥルクは古都で、トゥルク大聖堂（写真１５）は最初の建物が13世紀に建設された歴史のある教会で、フィンランド・ルーテル教の中央教会です。訪問したのは12月初めで、クリスマスの飾り付けが行われていた時期でした。ヘルシンキやトゥルクはフィンランドの南端に位置しますが、北緯60度付近です。11月には日出が8時～9時、日没が16時～15時、真昼でも太陽の高度は10度、気温は0度付近です。夏の時期に湖を訪問したいものです。

写真１２　テンペリアウキオ教会入口

写真１３　テンペリアウキオ教会内部

写真１４　テンペリアウキオ教会祭壇

写真１５　トゥルク大聖堂